

一般共同研究プロジェクト

タイ文化圏における山地民の歴史的研究

2009年度第1回研究会

日時： 2009年4月12日（日）午後13:00～18:00

場所： AA研棟マルチメディアセミナー室（304）

報告：

1. 田口善久氏（千葉大学文学部 准教授）
「湖南省江華県におけるミエン語調査 2009.3」
2. 吉川雅之氏（東京大学大学院総合文化研究科 准教授）
「湖南省江華県の言語調査—土話の分布と特徴」

研究会：「山地民の言語—湖南省南部の言語群」開催の趣旨

瑶族は16世紀以降、華南から東南アジア大陸部に遷移し始めた山地民として知られています。故地の華南における数多くある言語・方言のなかで、東南アジアで話されているのはミエン語（ユーミエン語）とムン語（藍靛瑶語）の二言語のみです。しかし、これまで華南の瑶系言語に関しては言語データが少なく、一体どのような系統の瑶語があるのか、その実態像が必ずしも明白であったとはいえない状況にありました。

近年、日本の言語学者が中国西南部においてフィールドワークを展開し、苗系言語や瑶系言語を含む諸言語の記述を手がけるようになり、貴州の苗語に関する成果としては2008年東京外国語大学から刊行された田口善久氏の『羅泊河語詞匯集』が挙げられます。また、2008年から吉川雅之氏が研究代表者を務める「湘南土語の総合的研究」という科研プロジェクトが発足し、フィールドワークによる瑶系言語と壮語などに関するデータを現地で積極的に収集しています。湖南・広東・広西が接する地域には漢族・瑶族・壮族が居住していますが、この地域で話されている「土話」「平話」と総称される言語群のなかには系統未詳のものが多く存在します。吉川氏の科研プロジェクトは、言語研究と物質文化研究（器具と建築物）の双方から、フィールドワークで得られたデータに基づいて言語と話者の形成を明らかにしようとしています。

この度の研究会では、吉川氏科研の中心メンバーの方にこれまでの調査で収集した言語データについて発表して頂くことになりました。発表はタイ文化圏の山地民の言語研究に大いに参考になりました。（唐立）

報告の要旨

1. 「湖南省江華県におけるミエン語調査 2009.3」

本発表では、科研費基盤B（海外学術調査）「湘南土話の総合的研究」（研究代表者：東京

大学准教授吉川雅之)による調査の成果の一部として、発表者が調査をした湖南省江華県のミエン語の概況について報告した。

調査日時は2009年3月23日から27日にかけての5日間、調査地点は中国湖南省江華県下の5地点、調査協力者は5地点の話者6人である。具体的には、江華県両岔河郷灯草村(A氏)、江華県両岔河郷横江村(B氏)、江華県凌江郷中星村(C氏)、江華県蔚竹口郷楓木村(D氏)、江華県両岔河郷草皇村(E氏、F氏)である(調査時間順)。調査方法は面接による基礎的語彙の聞き取り及び録音である。調査の目的は、江華県東南部に分布するミエン語のバラエティを調査することであり、音声表記で記録し、それを先行研究の記述と比較することで行った。

先行研究(毛宗武2004《瑶族勉语方言研究》民族出版社)によれば、江華県にはミエン語イウミエン方言に属する広滇土語と湘南土語が話されていることになっている。毛宗武2004は、広滇土語と湘南土語を分ける特徴として、①広滇土語は母音の長短をもつ(少なくとも/a//a:/の対立)が、湘南土語にはない(ただし広滇土語でも、すでに対立を失った地点もある)、②広滇土語は/-m, -n, -ŋ, -p, -t, -k/の音節末子音をもつが(ただし-kは出現率が低い)、湘南土語は/-ŋ, -ʔ/しかない、の2点をあげている。

発表者は6人の話者について以上の2点に重点を置きつつ調査を行った。その調査の結果を考察して、発表者は以下のような結論に到達した。

- (a)今回データを採集したミエン語は、先行研究による分類であるイウミエン方言(広滇土語と湘南土語)の枠内に収まる。
- (b)先行研究に述べられている湘南土語の特徴は、広滇土語でも若年層に広がりつつあるものである可能性がある。いずれも体系的に簡略化といえるタイプの変化なので、並行的・独立的な変化である可能性がある。
- (c)先行研究では明確に述べられていないが、2つの土語間には語彙の点でいくつかの明確な違いがある。話者Cは先行研究に記述のある湘南土語と語彙的な特徴で一致する。
- (d)したがって、今回採集したデータについては、語彙的な情報を重要視して話者Cの言語のみを湘南土語に分類する。(田口善久)

2. 「湖南省江華県の言語調査——土話の分布と特徴」

中国南部には湖南・広東・広西が接する山間部を中心に「平話」や「土話」と汎称される言語群が分布している。当該地域での言語調査は趙元任によるもの(1928-29, 調査結果は未発表)が最初とされるが、1980年代半ばまでは個性的特徴を共有するグループとして捉える視点は提示されていなかった。1980年代後半になって当時の中国における言語研究の成果が『中国语言地图集』へと結実する過程で初めてその特異性が注目され、学術名として「平話」と「土話」が立てられる。そのため調査・記述は1990年代にようやく本格的な開始を見、系統と位置付けに関する議論がこれとほぼ並行して行われてきたという経緯を有する。湖南南部に分布する湘南土話や広東北部に分布する粵北土話と広西壮族自治区

北部に分布する桂北平話の間に関連性を指摘する説、平話を粵語の一部分だと論ずる説、湘南土話を湘語の一部分と見なす説等が現在までに提示され、漢語方言学の一大トピックとして賑わいを呈するに至っているが、一部の学説間では根拠と判断基準に関して議論が噛み合っていない印象も禁じ得ない。

この言語群の特異な点は言語体系内のみならず言語体系外にも存在しており、その一つとして従来注意されてこなかったことだが民族識別を瑶族とする話者が一定数含まれている。これは当該地域が歴史的に瑶族の居住地であった事実と符合するものであり、例えば湖南江華瑶族自治県の土話は話者の民族識別が瑶族となっている。中国ではこの種の土話を漢語の方言として扱う研究と瑶語の方言として扱う研究とが存在するが、仮にこれらが瑶語の漢語化しつつある姿を呈しているものだとするのならば、この言語群の系統と位置付けへの問いは漢語方言研究の内部に閉じこめて行うのではなく、非漢語研究との双方向的視点に基づいた考察が必要になろう。更にその漢化プロセスについて物質文化の面からも有意義な証左が得られることが望ましい。

発表者は2008年9月と2009年3月に江華瑶族自治州にて簡単な現地調査を行った。そこで得られた言語データを主に報告を行った。報告の主な内容は次のとおりである。(1) 現地調査の概要、(2) 平話・土話の学術史、(3) 江華瑶族自治県の地理・歴史概況、(4) 江華瑶族自治県の言語種別と分布、(5) 平地部の土話の音韻特徴、(6) 盆地部の土話の語彙・文法形式の比較。(吉川雅之)

3. 質疑応答

各発表について活発な質疑応答が行われた。田口氏の発表については、ミエン語の調査方法などに質問が集中した。吉川氏が配布したレジュメに掲載されたデータについて、新谷所員から、(1) 平地部の土話(七都話)の声調には陰入が2つの調値に分かれているが、これは弁別されているものなのか。(2) 梧州話と客家語について言語変化というものの中には、系統論とは無関係に、異なる言語において同じように起こりうるものがあるのではないだろうかといった質問とコメントがあった。吉川氏は、(1)に対して、インフォーマントを変えると2つの陰入の調値の違いがはっきりしたと答えた。さらに、2つの陰入がそれぞれ漢字音としては粵語(広東語)の2つの陰入に対応する傾向が見られることを追加説明した。また、(2)に対して吉川氏は、現地民の言語区分に対する認識は、話者個人でずれがあるという見解を示した。吉野晃氏から民族認識というものは植民地以降のものであり、行政での区分とローカルな話者レベルでの区分とは別物であるとコメントした。また、新谷所員は漢字音を採集する限り、得られるデータは単音節(漢語的)にならざるをえないとコメントした後、当該言語の全体像を得るためにも語彙調査の徹底が望ましい、と二人の発表者の今後の調査に対する大きな期待を表明した。(唐立)